

発刊にあたって

副会長 稲田 苜胤

我々が日頃勤し^{いそ}み楽しむことを喜びとして詠っている漢詩は古代から綴られた中国の最も誇りとする文化と申せましょう。遣唐使が持ち帰った漢詩を咀嚼^{そじやく}し、いつしか日本人固有の感性をかさね、その時代々々に独自の詠唱法を編み出し長い年月を経て現在に詠い継がれてきました。本来異国の文化であった漢詩をいつしか自分たち自身の文学として日本流に活用し、学び詠っている事実は本家である中国の人々にとっても一種の驚きではないでしょうか。例えば中国の人々から漢詩の伝来や詠唱法など、どのようにして生まれ発展してきたのかと質問を受けても、詩吟を学ぶ者として最低限の説明ぐらいいは出来るようにしておきたいものです。漢詩の源流である古代中国の事情も弁^わえていければ、お互いの話もはずみ理解も深まることでしょう。本誌の目的は正にそこにあると申せましょう。「詩経」という中国最古の詩集から始まり、屈原による「楚辞」、又南北

朝時代の陶淵明、そして漢詩の全盛時代であった李白・杜甫を経て白居易の詩は我が国の平安貴族の必読書となりました。南宋の忠臣文天祥の獄中における「正氣の歌」は幕末の勤皇の志士達に感銘を与え、日本における漢詩の全盛期を作りあげた。中国詩であろうが日本詩であろうが、知識だけでなく苦しみや悲しみから得た体験を正直に詩に託した各時代の詩人達の「心の叫び」は一詩たりとも無駄なものはありません。本誌「悠久の名詩」を解読することによって、毎日を忙がしく生きる我々の心を癒し、勇気を与えてくれる道しるべとなればこの上ない喜びに存じます。漢詩は「悠久への誘い^{いざな}」。いつの時代にもあらゆる地域の風景にも、それ々の詩を探求すれば、忽ちその時代その場所へと迎え入れてくれます。「歴史は過去の例証による哲学」という格言があるように、本誌はその一端にすぎませんが、大いにご活用下さり私生活と社会における役割を果たすご自身のための心強いパートナーとして成果を上げて下さることを願ってやみません。